

第三部 だいさんぶ 第二話 だいにわ いもによらい伝説 でんせつ

この話は、源平の戦いで、平氏が負けて、源氏が栄え始めたころの話です。
昔、そう今から千年くらい前のこと、平家の一族は、

京都で「平清盛」の像を作っていたそうです。

その平氏が北潟へ流れてくるときに、その像をつんだ

ごさ舟でこちらの方へやって来たそうです。

そして、今の浜坂と塩屋の間の『ほりじり港』という

所についてたそうです。でも、この港は、とつても浅く、



すこ
少しでも波なみがおしかけてくると、うねりが起おこりました。

だからこういう重おもい物をつんでいると、ちんぼつする恐おそれが

あるので、命いのち おしい都みやこびと 人の平へい氏したちは、この何なん十じゆ貫かんも

ある像ぞうをつんでいては恐おそろしいと思おもい、像ぞうを湖みずうみに捨すてて、

北きた潟がたへ入はいって来たきたそうです。そして、今いまの安あん楽らく寺じや

やぐもじんじや ところ
八雲神社の所ところでちりぢりになり、このことは忘わすれてしまった

そうです。そして、何なん年ねんか過すぎたある日ひ……。この像ぞうが、

はまさか 浜はま坂さかの漁り師しうに拾ひろわれました。こころへんにはめつたにない石いしで、大たい変へん硬かたいし、木きの年ねん輪りんや、木もく目め
のあるめずらしいものであるため、その漁り師しうは、引ひきずり上あげて家いえへ持もって帰かえりました。



ある晩のこと、その漁師の夢の中に、あの像が出てきて、

「実は、わたしは、北潟の安楽寺にやってきたんにや。」

こんな所にはおられんのか。お願いじゃ、北潟の

安楽寺にやってくれ。」というおつげがあったそうなの。

けれども漁師は、「ばかなこと言えや、こなご網に

引っかかってきたようなもんやが、なんでそ

んなことを……。」

と言いつ訳をしていると、いく晩もいく晩も同じ

夢をみたそうなの。

そこで、とうとう、漁師は、像を安楽寺



へ引つ張っていったそうです。

昔は、現在の北潟小学校の上がり口のつきあたりのところに、台座をしてまつてありました。

しかし、校庭を広げる工事が始まって、道をつけるから、この像をここに置くわけにはいかない
ので、これを安楽寺のやぶのところへ持つてきて、今もその場所にあります。

その時、当時の安楽寺の法院さんが像を見て、「四角いだけで、なだらかな線にもなっていない。
せつかくのものだから・・・。」ということで、当時の有名な石屋をやとつて、この像にのみをいれ
ました。

ところが、そのとたん、像から血が出て細工ができなかったそうです。平清盛は、「天然痘」
で死んだから、「いもで死んだから、いもで死んだ像」ということで、この像のことを「いもによらい」と
今でも呼んでいます。

いもによらいは、^{なん}何のご利益^{りやく}があるかというのと、^は歯が痛いとき、^{みな}みんなここへ来て、^{とし}年の数^{かず}だけたいた^{まめ}豆をもつておまいりすると、^{はい}歯医者へいっても^な治^{なお}らないという^は歯が^な治^{なお}るそうです。

